

骨から見える風景

資料整理の過程から



楊洲周延《時代かゞみ 文政之頃 鶴御成》部分（城西大学水田美術館蔵）

市史編さん室では、市内に古くからある個人宅（旧家）などを訪問し、現在まで残されてきたさまざまな資料について調査しています。「資料」というと、古文書のような紙に文字が書かれたものを思い浮かべがちですが、なかには紙ではないもの、文字が書かれていないものも多く含まれます。

今回は立川市の旧家のひとつ、中野家から寄贈された資料を整理する過程で発見された骨を取り上げ、資料のもつ価値をさまざまな角度から明らかにします。

中野家文書

中野家は砂川村南砂川（八軒）の旧家です。中野家文書とは、中野家の蔵と母屋に収められてきた資料のまとまり（群）を指します。大正～昭和期における地域の商業や教育に関わる資料などがあり、その数は約1万2,900点にのびます。資料の点数が非常に多いため、現在でも整理の途上にあります。その中で今回発見されたのが2本の「骨」です。

なぞの2本の「骨」

この2本の骨は包み紙に入っており、発見された当初はなんの骨か、どこから来て、どんな理由で残されたのか、骨の来歴を示す資料は発見されませんでした。

そこで動物考古学の専門家である阿部常樹氏に骨の鑑定を依頼したところ、この正体不明の骨はタンチョウヅルの上腕骨一対であることがわかりました。

偶然に外部から紛れ込んだ可能性は低いと考えられ、現時点では、砂川村の旧家からツル科の骨がでてきたという事実のみが分かっています。

ツル科の骨から見る歴史

明治維新後の明治25年（1892）、「狩猟規則」

の公布により、鶴の狩猟は全国的に禁止されました。現在、鶴の主な生息地は北海道や九州・山口の一部に限られており、乱獲や、生息地である湿原の減少により飛来する数が少なくなり、保護の対象となっています。

立川市内の旧家資料からツル科と思われる骨が発見された、これ以上のことは現在分かっていません。次ページでは、鶴が禁猟される前の江戸時代までさかのぼり、鶴が当時の人々にとってどのような存在だったのか、鶴をとりまく環境を見ていきます。

家にねむる資料—諸家文書の調査



市史編さん室では、家に残る資料の調査もしています。地域の歴史を調べる上では、役場からの書類のような公的な資料だけでなく、日記やチラシ、記念写真のような私的な資料の調査も重要です。



江戸時代の鶴と人々

鶴と鷹狩

江戸時代、鶴は江戸をはじめ日本各地に広く生息しており、長寿の象徴や縁起物として、鷹狩における最上級の獲物でした。

鷹狩とは、鷹を使って獲物を取る狩猟のことで、近世の幕藩権力を象徴する儀式でした。そのなかでも徳川将軍家が鶴を捕える鷹狩を、特別な儀式として「鶴御^{つるお}なり成」と呼びました。

捕らえられた鶴は塩づめされ、昼夜兼行で京都に送られて朝廷に献上されました。鶴は将軍から諸大名に下賜されたり、大名も将軍に初物として「初鶴」を献上したりするなど、特別な贈答儀礼品でした。

鶴は、限られた身分の人間にしか捕ることも食べることも許されない、特別な鳥だったのです。



田中訥言「鶴包丁図」
(敦賀市立博物館蔵)

鶴ルール！～鶴を守るための決まりごと～

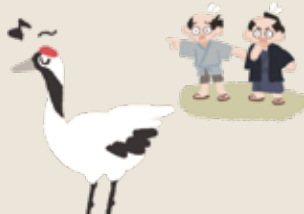
鶴は、「鷹狩のための特別な獲物」として、多くの決まり事によって「保護」されていました。尾張藩の鷹場に属していた近世立川地域（柴崎村・砂川村）も例外ではありませんでした（詳しくは『たちかわ物語』 vol.16）。

✓ 鶴を驚かせない！



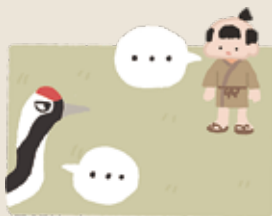
大きな音や振動で鶴を驚かせてはいけない（鷹場では鉄砲の使用や祭礼の開催、家・水車を建てる際には届出が必要であった）

✓ 鶴を見つけたらすぐ報告！



鶴を見かけたらすぐに陣屋（鷹場の管理所）に報告する。また、捕まえたり、追いかけて逃がしたりしてはいけない

✓ 鶴に近づかない！



鷹場の範囲は陣屋によって定められているので、鶴に近づかない、境界を示す杭が動いたり壊れたりしないように管理しなくてはならない

エピソード1. 鶴飛来！鶴注意！

文久2年（1862）7月に榎戸新田（国分寺市）に鶴（種類は不明）が飛来した時には、村役人たちは村内の人が鶴に近づかずに見守るよう指示を出すとともに、ただちに立川陣屋（柴崎村）に届け出ました。さらに、村役人の一人で、鷹場の管理を担う鷹場預り案内役を務めていた榎戸源蔵は、鶴が近隣へ飛来することに備え、鷹場内の22か村に対して注意喚起を廻状で通達しました。

エピソード2. 鶴で通行止め！

柴崎村名主鈴木平九郎が記した「公私日記」の弘化4年（1847）12月21日の記事に、「向島辺より千住辺江かけ鶴 御成二而両国通り通行止二付早朝本所江罷越」の記載があります。平九郎が年貢上納のために江戸へ出府した際、鶴御成に伴う「両国通」の通行止に遭遇したことがわかります。

このように、鶴は鷹狩の獲物の中でも特別な存在であり、人々の生活に影響を与える規模で「保護」が徹底されていました。今回思いがけない形でタンチョウヅルの骨が発見され、その背景を調べると、立川の歴史の風景が浮かび上がってきました。文字の無い資料も扱いながら、多面的な調査を進め、今後も地域の歴史を叙述していきます。

参考文献 ■『小平市史 近世編』（2012、小平市） ■『鈴木平九郎 公私日記 第三巻』（2013、立川市教育委員会） ■『武蔵国分寺跡資料館だより』43～45（2020・2021） ■西村慎太郎『宮中のシェフ、鶴をさばく』（2012、吉川弘文館） ■久井貴世『鷹狩をめぐる江戸時代のツルと人との関わり』『鷹・鷹場・環境研究』5（2021） ■山崎久登『江戸時代多摩川の生態系と鷹場』（2022、公益財団法人東急財団）